

# 近代化論と社会システム変化論についての覚書

—ベラー・レヴィ・パースنز—

倉田和四生

## はじめに

いうまでもなく「社会」は生成発展してやまない動態としてのみ存在する。静止したものとして処理することがあっても、それはあくまで便宜上のことにすぎない。静止した姿をとらえた後には、動く姿をとらえる課題が残されている。

コントやスペンサーなどの初期の社会学者が社会学に対して動学をその学問組織の中心にすえているのは、この意味で正しい認識態度として高く評価されなければならない。

爾来、幾多のすぐれた社会学者によってこの問題に色々な形で接近が試みられて来た。多くの社会学者によってさまざまな社会変化論が展開されている。今後も新しい変化論が生れていくであろう。社会変化論は社会学者が最初から取りくんだ問題であると同時に最後の目標でもある。

T・パースنزが『社会システム論』を展開することによって、理論社会学に幾つか貢献したと云えるが、その一つに「構造機能分析法」を整備したことがあげられると思う。<sup>1)</sup>

しかしながら彼の分析軸の中心が構造機能分析にある限り、社会システムの変化の問題は第二義的なものに成らざるを得ない。事実「社会システム論」に於ては、変化論に一章をさいているものの、試論的なものにとどまっている。<sup>2)</sup> 然し近來システム変化の問題についても或る程度の進展がうかがわれる。新にインプット・アウトプットの過程やサイバネテックスの統制の概念が導入され、システム変化の問題が論ぜられている。<sup>3)</sup>

R・N・ベラーは「日本の近代化と宗教倫理」(Tokugawa Religions) の中で、徳川時代の日

本の社会構造の特質を解明することによって日本の近代化の特異性を論じているが、その基本図式はパースンズに負っている。

M・J・レヴィも東洋の社会に関心をもち、社会変化論を展開しているが、彼も又パースンズの理論に強い影響を受けている。

ここで、ベラーの基本図式、レヴィの見解をみた上で、パースンズの変化論を検討してみたい。

## 1 R・N・ベラーの研究図式

パースンズはワーキングペーパーに於てベールズのカテゴリーと自己の型相変数を結合して四つの機能分化の図式を作り出した。以来この図式が彼の理論の中心にすえられている。パースンズに学んだベラーは、M・ウェバー的発想とこの図式の組合せを用いて日本の近代化過程を説明している。まずベラーの研究図式を検討してみよう。

ベラーはウェバーの考えに従って伝統主義の宗教は社会変化を遅らせるが、高度の合理化を経た救済宗教は一般的、非状況的な倫理的行為の原理を与え、行動の合理化をもたらすと考える。そこで伝統主義からの解放が前提となるが、これは聖なるものの再解釈によるもので、これによってはじめて合理化の過程に適した価値と動機づけが正当化され伝統主義が克服される<sup>4)</sup>と考えている。これは正にウェーバの発想を受継いだものといえる。

日本の近代化過程についての彼の問題意識は、非西欧諸国のうち、なぜ日本のみが急速に近代化することに成功したかを究明することにあつた。然かもウェーバー方式にならって、日本の伝統的宗教が、この近代化過程にいかなる役割を果たした

か、更に日本の近代化の過程が独自の性格をもつのは何故かを説明しようとする。

そしてそのような分析を遂行する基本的な図式を彼はパースンズに求めている。それは二つの命題の組合せと解することが出来よう。

第一の命題は、価値体系は長期にわたって形成されたものであり、他の要因に比べ変化しにくい要因と考えられるから、近代化の分析にはこの価値を所与として分析枠の中心に据えることが出来るという考えである。<sup>5)</sup>

第二の命題は、価値体系は歴史的な個性をもつものであるが、その独自性を示すには、「型相変数」の組合せ、及び四つの機能分化の図式に於ける四つの価値のうちいづれが優位であるかによって決めることが出来る、というものである。

彼はパースンズの四組の型相変数のうち「状況のサイド」に属する「普遍主義」―「個別主義」と「遂行」―「資質」の二組を選び、四つの組合せを考える。①は「個別主義」―「遂行」であるが、これが日本の社会構造である。②は「普遍主義」―「遂行」でこれはアメリカの社会構造、③は「個別主義」―「資質」に重点を置く社会で、これは中国の社会の類型である。④の「普遍主義」―「資質」はここでは取扱われていない。

更にこれらは四つの機能的サブシステムと結合される。②の「普遍主義―遂行」は「適応行動」(経済・A次元)と、①の「個別主義―遂行」は「目標達成」(政治・G次元)と、③の「個別―資質」は「統合」(I次元)と、④の「普遍主義―資質」は「潜在性」(L次元)に結合する。<sup>6)</sup> これらの図式は価値体系にも用いられる。即ち①は「政治価値」②は「経済価値」③は「統合価値」④は「文化価値」の四つと成る。<sup>7)</sup> そこでアメリカは「経済価値」が最も優位性を占める社会であり、日本は「政治価値」が優位性を占める社会である。この社会では、生産よりもむしろ集合体目標に中心的関心があり忠誠が第一の美德となる。支配・被支配が「働くこと」よりも重要であり、権力が富よりも重要視される。<sup>8)</sup>

ベラーはこのように価値類型の違いが独特の近代化過程を解くかぎであると考えた。これによ

て初めて、日本の特異な経済の発展が理解されると考えている。

ベラーについては、三つの問題点が指摘されよう。第一は、独自の価値体系を前提にして、近代化過程の特異性を主張することは確かにすぐれた着想であるといえる。従来近代化論が普遍性の側面にのみ注目し、独自の性格を説明することが少なかった点を考えると、確かに盲点をつけている。しかしながら価値体系自体が変化することに関しては、この図式は全く無力だといわなければならない。近代化の進行自体が価値体系の変化を推進するという反面も無視することが出来ない。この点については、文化システムを価値体系・信念体系・表現体系に区別し、それらの関係を考察することが必要である。

第二に彼の研究はウェバー的関心にもとずいて近代化の発端をさぐる研究にとどまっている。然し現実の変化の進行過程は非常に複雑なものであり多くの要因や条件を考慮しなければならない。又その具体的な分析は、価値体系のレベルの他に社会制度のレベル、社会組織のレベル及び技術的レベルをも考慮に入れなければならない。単に近代化をおし進める価値体系が徳川時代から存在していたことを示すだけでは、井上清氏が述べているように、何故十五年の血なまぐさい動乱があの時期に起きたのかを明かにし得ない。<sup>9)</sup>

第三に、彼の方法に従えば日本とソ連は同じ価値体系をもっていることに成るから論理的には両者の近代化も同一のものと成るが、現実には、大きく異っている。型相変数は、四つに限定せずサブタイプを用意する必要がある。更に近代化の研究は、価値レベルのみならず制度のレベルに於ても追求されなければならない。

ベラーとは関心の焦点を異にするが、ある程度の具体的な研究方法を示したものとして次にレヴィイのについて検討してみよう。

## 2 M・J・レヴィイの見解

レヴィイもパースンズの影響を受けて、構造機能分析の方法によって「社会」の比較研究を目指しているが、殊に東洋に強い関心を持ち、又支那や

日本の近代化過程の研究に取り組んでいる。

(1) 近代社会の規定 彼は近代社会を規定する為の客観的基準を、その社会に於いて使用される動力源として、無生物資源が用いられる程度によって規定する。例へば動力として牛馬のような生物を利用する割合よりも動物以外の動力源を多く使用する社会が近代社会である。近代化の進行程度はその割合によって決まると考えられている。<sup>10)</sup>

次に近代社会の特徴として、彼は次の点を指適する。① 社会組織の特殊化が進むこと。その内容或は結果としては、a 社会の成員の技能が特殊化する。b 大量生産が行われるように成る。c 協力の体系が重要な問題となる。d 社会的単位の自足性が減少する。e 普遍的倫理 Universal ethic が優位な価値となる。② 交換のための普遍的メディアが存在する。③ 権力の中央集中化と地方分散、④ 官僚制がその「数」に於いても「規模」に於いても飛躍的に進む。⑤ 家族は核家族化への方向をたどり、規模が小さく成り機能も減少する。

(2) 研究視点 近代社会をこのように見た彼は、近代化研究の視点として五つあげている。

① 無生物資源を動力源としてどの程度使用しているかの検討、② 近代化が自生的なものか、移入されたものか、これによって政府の果す役割が異ってくる。③ 権力の集中化と地方分散がどの様にバランスしているかの問題。

④ 社会の規模がどの程度か。⑤ 近代化の進行過程に起った社会変動が革新的か革命的か。即ち社会構造が一部改革されて引継がれているか、全社会構造が破壊され、全く新しい制度が制定されるか。以上がレヴィの提示する視点である。

(3) 研究枠組 研究のための基本的な概念として、社会システムと具体的単位と分析的側面に区別する。これはパースンズのシステム概念の基本的思考法である。

又、型相変数として、1) rational-nonrational. 2) universalism-particularism. 3) functional specificity-functional diffuseness. 4) affective neutrality-affective involvement の四つを用いる。これもパースンズ型相変数の若干

の修正と之えよう。<sup>11)</sup>

彼の研究方法は客観的な指標を含みかつ具体的である。近代化がどの様にして始められたかだけでなく、その進行過程を具体的、現実的に分析しようとする態度が見られる。然しながらこれらの指標には客観的、技術的なものと、社会構造、社会組織とが並列的に提示されているだけであり、社会構造の諸側面についても、相互の関連性については必ずしも明かにされていない。問題は特定の指標の数値よりもそれらの関連にある。

レヴィの研究方法に近い立場をとるものとして同じくプリンストン大学のW・E・ムーアーがある。両者は① 近代化と産業化を理論的には区別しながら、事実上近代化を、内容的に、産業化として取扱う。② 産業化を規定するものとして無生物エネルギーの高度使用を用いる。この点に於て同一の線にそっている。<sup>12)</sup>

ムーアーは産業化の「条件」として①価値②制度③組織④動機づけをあげている。

次に産業化の進行に伴う現象と結果を、1) 経済組織 2) 人口と生態学的構造 3) 社会構造の三つの側面に於て検討している。<sup>13)</sup> これらの側面には、具体的な指標が示されている為、実証的な研究の枠組としては極めて優れたものといえる。然しながら彼の観点は経済的手段性を認めながらも結局のところ経済的、客観的なものへの偏重が見られ便宜主義に流れているといえるのではないか、又示されている指標も、必ずしも体系的に整理されていないうらみがある。例へば社会構造の中に価値・態度と社会組織が混在している。

然しその経験的、実証的枠組は極めて有効なものといえる。

### 3 近代化論の検討

(1) 各種の近代化論 ベラーの関心がウエバー的発想に基いて、価値体系の核心としての宗教が経済に及ぼす、いわば近代化の原初過程の分析にあるのに対して、レヴィの関心は近代過程の中の社会構造の特徴を明かにし、併せて客観的な要素を引出し、それを指標として比較検討することにある。

ところでこのような技術的、客観的、或は操作的なアプローチはアメリカの学者の間に或る程度一般的に見られる傾向である。1960年夏の箱根会議に於ける日本近代化に関する討論を作業仮説にまとめた、J・W・ホールの論文はこの傾向を明確に示している。<sup>14)</sup> 彼があげている指標は①読み書き能力の普及②人口の都市集中、都市中心に社会が組織される③無生物エネルギーの高度使用、商品流通・サービス機関の発達、④成員の相互作用、経済的、政治的参加⑤マスコミ網の滲透⑥大規模な社会的施設、官僚化⑦人口集団が国の統制に統一されることである。これはレヴィの示したものと類似している。

E・O・ライシャワーの近代化論もこれに近いものである。彼の考えによれば、近代化とはより高度の技術水準へ向うプロセスであるとされ、その指標としては科学技術の社会的利用、教育の普及、マスコミの発達、国民の政治に関与する可能性等をあげている。<sup>15)</sup>

又、経済成長の五段階を説いた、W・W・ロストウの経済史的な立場や分析方法も経済的・技術的な指標によって、経済的な発展段階（伝統社会・離陸先行条件への過渡期・離陸期・成熟への前進期・高度大衆消費期）を区別することであった。<sup>16)</sup>

(2) その特質 ところでこれらの近代化論者の特徴としては、三点を示すことが出来よう。まず第一に、これらの論者はそれぞれ、視点を異にする為、説明の仕方、強調点の置き方に違いはあるが、基本的な視点として、変化のプロセスを複雑な諸要因（経済・技術・政治・社会・文化等）の組合せによるダイナミックスであり、この過程は、単一の要因によって決定されるものではないとし、決定要因の究明よりも様式論・測定論に焦点を合せて論じている。

次に第二の特徴は既に示唆したように、これらの論者の殆んどが近代化を考える際に技術的・客観的側面をその中心にすえ、これを基本的なものとしている点である。M・J・レヴィ、W・E・ムーアー、E・O・ライシャワー、W・W・ロストウのいずれもがこのような見解を示している。この側面から見る限り、近代化は普遍性を持ち、不可逆的に進行する時代の宿命である。レヴィが近

代化の進行に従って、社会はますます類似して来ると云う時、恐らく彼はこの点に注目しているであろう。従ってこの側面に注目する限り各国の近代化は普遍的なものであり、必ず一定の段階をたどるものとして、そのコースと段階を示すことも出来るし、特定の指標によって測定し比較可能なものと考えることが出来よう。

第三に、然しながら、これと逆に各論者は各国の近代化がそれぞれ独特の性格を持つことを見逃してはいない。然もこの様な近代化に独自の性格を与えるものは近代化が始まる前に既に存在している伝統的な「価値体系」の相違にあることも認めている。近代化の成否はこの価値体系が技術をどの様にコントロールするかにかかっていると云えよう。然しながら、これまで、この点についての理論的な説明は十分に果されていなかった。ライシャワーの見方で注目される点は、経済制度と、政治制度を分析的に区別し、その組合せによって社会の類型及び近代化のプロセスの特異性を示している点であろう。ペラーはこの点をパースنزの図式を用いて、最も明確に示したことに成る。

(3) 問題点 ここでは三つの問題点が指摘される。既に述べたように、近代化論の展開は近代化の普遍的な側面としての技術の進展及び経済発展の側面に関して展開されて来た。これらは普遍的な尺度をもって測定することが可能であるから、各社会の間の比較論究が可能である。然しこのような普遍的な側面を論究するだけでは各社会がそれぞれ、たどっているその社会独特の近代化のプロセスを明かにすることは不可能であろう。実際に進行していく近代化は各社会に於いて大きく異っている。日本の技術水準や生産性がいくら向上しても、アメリカと同じ社会に成ることはない。したがって、われわれは近代化論を物質や機械技術のレベルに限定しなければならぬ必然性をどこにも見出すことは出来ない。近代化はすぐれて人間の行為様式の近代化であり、社会制度の近代化でなければならない。このような意味で従来近代化論であり重視されなかった人間の態度（パナリタテシステム）や価値・規範（文化システム）及び社会システムそのものの近代化こそ近

代化論の中心に位置すべきであると考え。

第二の問題はこのように、近代化を複雑なプロセスと考え技術や経済の側面の外に価値規範、社会組織の側面を考察しなければならぬとするならば、これらの諸側面を総合する一般的な枠組が必須の要件と成る。変化過程の一般的な枠組を構成するためには、パースンズの社会システム変化論が一つの手がかりを提供してくれると考えられる。この点については最後の「研究の見取図」のレベルの問題として取上げる。

第三の問題は近代化の論者がそれぞれ、多く指標を提示しながら、これら諸要素間の関連について殆んど明確な説明をしていない点である。荒瀬豊氏が指摘しているように<sup>17)</sup>指標を示すと同時に諸要素間の関連を説明する義務を負うことに成る。然し示された指標の多くは、近代化の要因ではなく、結果の測定の指標であるから、もともと近代化論の多くは、一元論的史観の克服を目指してはいないと見るべきであろう。この点についてはパースンズの理論に従いながら、最後の見取図のところで変化のダイナミックスとして示そうと試みた。

#### 4 T・パースンズの変化論(1)

##### — 変化の源泉 —

パースンズの分析視角は三つの基本的な軸によって構成されている。1は「構造—機能分析」の軸、2は「均衡過程—構造変化」の軸、3は「統制のハイヤラーキー」の軸である。第三のものはサイバネテックスの理論的成果を社会システムに導入した新しい試みとして注目されるが、当面の社会システム変化論の位置は第二の軸にある。

近代化論を検討したあとでパースンズの変化論を検討してみよう。その構成は①変化の源泉 ②変化が構造的要素に及ぼす影響 ③変化の傾向と一般化から成っている。以下順次取り上げてゆこう。<sup>18)</sup>

(1) 変化分析上の特質、彼の変化論は原因論に重点を置かず様式論・ダイナックスに重点を置いている。多元的な見地は多くのアメリカの学者のとりどころであるが、一元論がドグマにおちいり

易いように、多元論も単に多くの要因と提示するだけに終わってはならない。重要なことはこれら要因間の関連を体系的に示すことでなければならない。<sup>19)</sup>

第二に変化の原動力に成る要素を体系的に分析して社会システムとの関係を明らかにする。

第三は変化が社会システムの統制のハイヤラーキー（価値→規範→集合体→役割の順）に関係するということである。若し衝激の大きさをほぼ一定と仮定するなら、それによって生ずる構造変化の蓋然性は統制のハイヤラーキーに応じて大きくなる。安定したシステムは内的緊張を内部において処理するためのメカニズムを有効に働かせることが出来るから、内外に生じた変化への衝激を構造変化にまで拡大しないうちに中和することが出来るからである。ここから彼にとって変化の問題の中核は「価値システムの安定度」にあることが理解される。<sup>20)</sup>

(2) 外因 変化の原因は「内因」と、「外因」に区別して考えられる。外因は社会システムの外部にある「有機体」、「パーソナリティー」、「文化システム」の変化をひきおこす傾向である。自然的環境は有機体や文化システムを媒介にして影響する。次に最も重要な変化の外的源は「他の社会システム」に起きた変化である。起された変化因は、システム間のインプット・アウトプットによって次々に伝達される。システムと他のシステムとの関係は、システム間の関係及びシステム—サブシステムの関係として処理しなければならない。<sup>21)</sup>

(3) 内因 —緊張— 変化の内的原因をなす傾向は「緊張」である。緊張がある限界以上に強まると、社会統制のメカニズムによって処理することが不可能に成る。この場合には社会システムの単位を統制する規範を変更しなければならなくなる。一般的に言って、内的変化は低次の統制のメカニズムが緊張要因の抑圧に失敗したときに起る。<sup>22)</sup> (7の図参照)

## 5 パースンズの変化論(2)

### —変化の及ぼす衝激—

パースンズの考え方によれば、システムの安定は二つのシステムのインプット・アウトプットの間のバランスの機能であるから、過剰のインプットもインプットの不足と同様に攪乱の要因と成る。次に変化の衝激とその波及の点から見てみよう。

(1) 五つの変容 衝激は五つの条件に左右される。①攪乱の大きさ、②システムに対するユニットの割合、③ユニットがシステムに対して演ずる機能的貢献の重要さ、④構造的要素のハイヤーキー、即ち役割→集合体→規範→価値の順に変化し易い。⑤衝激に対する抵抗の程度。即ちシステムの安定性によって衝激は様々に変る。次に彼の具体的分析例についてみよう。<sup>23)</sup>

(2) 価値規範の変化とその特殊化 社会システムの構造変化は規範的文化の変化である。最高のレベルは価値システムの変化であり、このレベルから「分化」と「分離」と「特殊化」にしたがって、下位システムの規範的文化の変化に移っていく。特殊化を通じて、役割のレベル、動機づけにいたる。したがってこれは主要な攪乱が適宜、個人の役割レベルの動機づけの攪乱へと拡散し、必要な条件のもとで構造変化へと導かれる。多くの変化のプロセスは幾つかのレベルに於て同時に起り、次々とコントロールのレベルを通過してその影響を伝えていく。<sup>24)</sup>

(3) 後進国の例 次に産業化の過程に於ける後進国の例について彼の見解をたどってみよう。後進国に対して、インプットされた衝激の二つの主要な焦点は政治的側面と文化的側面であって、経済的ではない。爆発するエネルギーは、帝国主義に対する激しい憎悪にみられるように、国家的独立と権力に向けられる。この場合、政治的先入観は、二つの方向に伝播する、①は政治的権力にとっ念て手段的なものであり然かも集合的な業績のシンボルとしての経済発展。②は政治権力と経済的生産性が結びついた「機能的価値」システムである。この場合はなお最高レベルの価値は、モ

デルと成っている社会の価値とは相異を示している。次にもう一つの重要なシンボリックな表現は西欧社会に対する「物質主義」という共通の批判である。

そこで例えばインドの場合には西欧の物質主義に汚染されるとなしに産業化が為されたと主張される。このように「最高の価値」を変更しないままに次のレベルの規範・制度を特殊化の過程で変えることによって適応型を作り出そうとする。

後進国の産業化の過程の中で生じた緊張をいかにして抑圧、規制するかを検討することは困難であるが、彼は二点を指摘する。①は政治的経済的発展を手段の性格のものと思なすことであり、②は社会主義のようなシンボルによって暗黙の葛藤を橋がけすることである。

更に彼は二つのインプットなしには主要な変化の原動力は生じそうもないということを指摘している。即ち①は現実的に政治的劣等性が存在すること。③は適当なモデルが存在することである。<sup>25)</sup>

## 6 パースンズの変化論(3)

### —構造変化のプロセスのタイプ—

次に構造変化のプロセスのタイプについてどの程度の一般化が可能かという同題についてみよう。

(1) 構造変化の基礎構造 システムの安定は規範の制度化によって保たれるが、規範の制度化はパーソナリティーへの規範の内在化を意味するから、構造変化の分析にあたっては合理的側面だけでなく非合理的な動機づけの構造も明らかにしなければならいと云うのが、パースンズの基本的主張である。彼によれば、構造変化は「緊張」が一定のレベルに達し、統制に失敗した時に起るとされる。ところで緊張は心理学的に非合理的な「攪乱の徴候」によって示される。これは希望・望ましいもの=恐れ・不安の軸で組織される。<sup>26)</sup> これはアンビバレントな動機づけに他ならない。攪乱の徴候は構造変化をもたらすものにも、引き起さぬものにも共通に含まれている。これが構造変化をもたらすかどうかは、攪乱の力の強さと、受手の

サンクションの強さとのバランスによる。

緊張は技術的、経済的、政治的レベルから他に拡大していく。この際、高い段階の統制へと順次波及していく様相を追求しなければならないと、彼は述べている。<sup>27)</sup>

然しながら制度的レベルに達した場合でも、緊張の強さだけでは変化を説明することにはならぬ。攪乱と統制のバランスに加えて次の点が構造変化を左右する条件となる。①は既得権を持つ抵抗の制度構造を排除するメカニズムがあるか。②変化に対して肯定的な反作用に対して可能性を与えること。③新に制度化されるべきモデルが必要である。④新しいサンクションの型が、同調者に対して報酬を与えること。

「アンビバレントな動機づけ→緊張→逸脱→変化」というパースンズの基本構造は、システムの変化要因を「緊張」という心理学的な次元で説明する。しかしパースンズの変化論の最大の問題点はここに在ると思われる。確かに動機づけは心理的には同一のものであっても、意味的には大きく異なる。無方向的逸脱もあれば、反体制的イデオロギーによって積極的に動機づけられた逸脱もある。相異なる価値体系がはげしく戦っている社会に於ては、緊張→逸脱を価値の相異に関係づけなければ現実的な分析は不可能である。これでは矛盾する価値の動機づけは明らかにされない。相矛盾する多元的価値の、矛盾する動機づけの中にこそ現代社会の葛藤の要因がある。然かもこれらの社会的価値はそれぞれ制度化された構造を持っているため、闘争的關係そのものが制度化されているといえる。この制度化された葛藤要因は、重要な変化の要因である。これは勿論個人の動機づけに基礎づけられているが、個人心理とはレベルを異にしている。

(2) キンシップから職業役割の分化 次に全体社会のレベルに準ずる、構造変化の例を取り上げてみよう。まず「機能分化」について述べる。機能分化のプロセスは社会変化の基本タイプの一つである。最もいい例はキンシップ構造から職業役割の分化である。これは古い構造枠組の中では利用出来ない新しい機会の普及という形でおこる。

このプロセスで重要なことは古い型に従うのを

おさえると同時に、ある程度の制度化された許容と支持がなければならないことである。

次に組織的レベルに於て新しい型の積極的モデルが示され、更に新しいモデルが価値によって正当化されることである。

新しい機会の正当化は、既にはっきり制度化された価値システムを、新しい機会に照らして、「特殊化」することによって為される。ここで重要な点は、経済生産性の増大が善であるとされ、然かも、機会を多くして利益を得るために必要な、低いレベルに於ける制度構造の攪乱も容認され正当化されることに成ったことである。

構造分化のプロセスと社会の価値システムを含むプロセスの間の区別は彼の考えるところによれば相対的なものである。複合社会に於いては、分化のプロセスは低いレベルへの特殊化と、高いレベルの構造的「分離」となる。<sup>28)</sup>

(3) 全体社会に於ける価値体系の変化 最も高いレベルの価値体系の変化には、モデルとの関係で二つのタイプがある。第一は構造変化のモデルが外に求められるもの、第二は構造変化のモデルが外に求められず、内部に於て創造されるものである。

第一のタイプは英国の産業化をモデルにしたアメリカを含めて、大多数の後進国がこれに当る。

日本とソ連の場合を比較すると、非常に違っているが、両方とも強力な政府の圧力のもとに産業化された点に於ては、類似性を持ち又これは決して偶然ではないと彼は見ている。いずれの場合にも価値委託のイデオロギー的な正当化が特に重要な役割を演じた。日本の場合には神道的伝統の国民的な内包が特に重要であり、<sup>29)</sup> ソ連の場合にはコミニストの革命権力は、大抵の西欧諸国より、はるかに強力な国家の優先を強調するロシアの社会構造に接合されたものである。政党はイデオロギーの教化の主要な機関として機能し、教化はコミニズムのユートピア概念のもとに、経済的生産性に高い委託を与えるに必要な価値を教えた。

後進国の産業化の過程に於て、政府機関と社会主義イデオロギーが重要な役割を演ずる理由の一つは、実際的な緊急事態に直面しているにもかかわらず

ならず、機能的レベルの価値委託が十分に用意されていないということである。

第二のタイプはモデルが外から得られることが出来ないで、内部に於て革新的に創造されるものである。社会と文化システムの相互作用と相互依存を含む複雑なプロセスの中で、文化的変化が全体社会のレベルの価値の変更をもたらす。これはウェバーの云うカリスマ的革新に当る。この変化の焦点は文化システムの宗教的側面にある。それは社会に於ける個人の生活の意味と、社会それ自体の規定の変更に関連している。カリスマ的パーソナリティーの特殊な役割はパーソナリティー理論にとって特殊な問題を含み、社会的、或は文化的要素のいづれにも解消出来ないものである。<sup>30)</sup>

### 7 社会変化研究の見取図

これ迄ベラー、レヴィ、ムーアー、パースンズの変化論について検討してきたが、最後にこれらの理論を摂取しながら一つの試みとして変化論の見取図を構成してみよう。

**変化要因の源泉** 変化要因については一元的な見方を排して多元的な見方をとりたい。構造変化の考察は外部のシステムから社会システムに加えられた変化要因の衝激によって、規範からの逸脱が起り、価値体系が崩壊することである、と考える。要因の所在及びその社会システムへのインプットの経路については右図のように理解する。

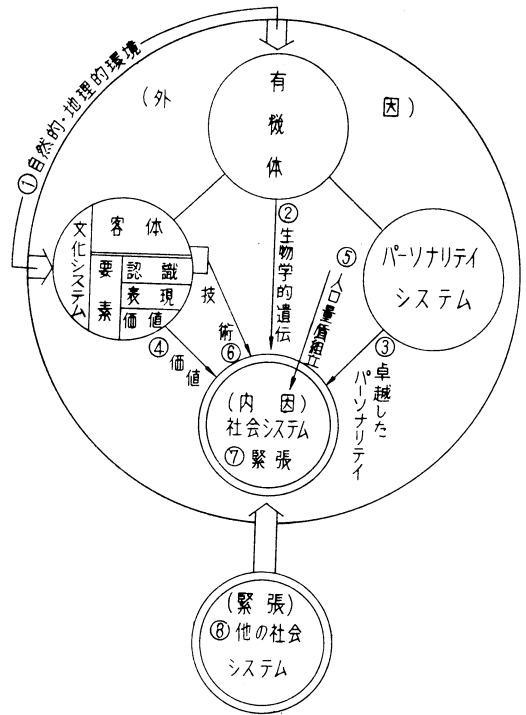
社会変化論において、変化要因の究明が重要な課題であることは論をまたないが、更に重要なことは変化因の強さの絶対値よりも、諸要因が具体的現実的な状況において、他の条件とどのようにかみ合わさって、全体としての変化のプロセスを形成するかというダイナミックスを明かにすることであろう。

#### 社会システム変化研究の三つのレベル

##### I 文化システムのレベル

(1) 価値体系 既に述べたように価値体系は長期間にわたって歴史的に形成されるものであるから最も変化し難いものであり、個性的歴史的なものである。伝統的価値が近代化の条件を為し、そ

(行為のサブシステムと変化要因)



の特殊なコースを規定するものであることはパースンズ、ベラーが示した。

(2) 規範・制度 規範は上位の価値が特殊化されたものであり、個々の集合体(組織)を規制するものである。規範は価値の規制を受けており密接に関連しなければならないが、価値は一般的な型をとる為、両者の間にはかなり弾力的な幅が存在している。従って価値とは相対的に独立の状態に規範の変化が為される。即ち機能的レベルに於ける適応型を生み出す。後進国の近代化のプロセスに於いて見られる様に、価値体系を変化しないままに、産業化を遂行する。然しこの様な適応型には価値と現実的あり方との間に絶えざる緊張を生み出し、これが集積されてやがて上位の価値体系をおびやかすことになる。

##### II 社会システムのレベル

(3) 社会組織・集合体(役割) 集合体は役割の体系であるが規範の規制を受けつつ、役割を統制している。ここでは集合体の数量的変化と機能的分化及び逸脱によるシステムの崩壊の三つが重要である。文化は社会システムに制度化され、こ



のレベルに於て機能する。

### III フィジカルな構造のレベル

このレベルに於ては人口と文化要素のうち観念(認識)体系及び文化客体の複合体である技術があげられる。科学及びその成果は合理的なものとして受入れられ易く、累積的に拡大滲透していく為、長期的にみれば非常に大きな影響を与える。やがてこれが、規範→価値体系へと影響を与える。

**型相及び指標** 次に変化を論ずる際に必要な型相及び指標を3つのレベルに応じて整理してみよう。

I 文化システムレベル 価値・規範 このレベルの特性を規定する為にはパースンズの「型相変数」及び「四つの価値の図式」が有効である。これは既に一部述べてきたし、周知の事実であるからここでは詳述をさし控えたい。(属性から業績主義へ特殊なつながりから普遍的な基準へなど)

II 社会システムレベル集合体 この指標は

a 具体的システムとして

- ① アソシエーションの増大(数・量)
- ② ビュロクラシーの増大
- ③ 家族のサイズの減少
- ④ 社会システムの機能分化

b 機能的側面として

- (経 済) ① マーケットシステムの拡大  
 (政 治) ② 権力の集中・分散のバランス  
 ③ 政治的参与の増大  
 (統 制) ④ 中央機関による統制の強化  
 ⑤ 非公式統制の弱化・病理現象の増大  
 (社会化緊張解消) ⑥ 教育機関への期待の増加・就学率の向上及び期間の延長  
 ⑦ 仕事とレジャーの分離及びその増大

III フィジカルな構造のレベル

a 人口 生態学的構造

- ① 人口の水平移動(都市集中) 密度・異質性の増加
- ② 人口の垂直移動の増加

b 技 術

- ③ 無生物エネルギーの増大

④ 交通通信手段等各種技術水準の向上 暫定的な試みとして以上のものをあげることが出来る。

各レベル間の相互関係については以下、変化のダイナミックスにおいて論究しよう。

**変化のダイナミックス** 変化のプロセスは変化要因の衝激の強さとシステム安定化作用との間の力動的な関係の展開であると考えられる。従ってこれは分析的に、

- ① 内外の変化要因の社会システムに対する衝激の強さ
- ② システムの安定度—制度化の程度
- ③ システム統制のハイヤーキー
  - a システムレベル
  - b 構成要素のレベル
- ④ 構造変化の条件

の四つに区分して考えることが出来る。

①の変化要因の衝激の強さは外的規定と内因との双方が絶対値としてどの程度強いかが問題とされる。次にこれがシステムの持つ状態との相対的な関係に於て変化因となる。これを規定するものはまず②システムの安定度である。これは規範に対する適合の度合と見ることが出来るから、価値の制度化の程度にかかる。価値は本来文化システムに属するが、制度化によって社会システムの構造を形成する。制度化された価値はシステムの安定化の機能を果す。そこでシステムの変化は制度化された価値の安定化作用と変化要因との力関係によって発生するものである。この場合、パースンズに於ては甚だあいまいであるが、価値を一元的に考えてはならぬ。普通相矛盾する価値が同時に存在するのであるから、価値(A)に対して矛盾する価値(B)はパーソナリティに対してシステムを攪乱する様な方向に動機づけをする。この場合価値はシステムの安定化とは逆にむしろ破壊作用を行っている。相矛盾する価値が共存する場合には価値の相異が社会システムの緊張を引起し、社会システムの変化を導く。このような両者のダイナミックな関係を理論化することが必要であろう。

③次にシステム自体が統制のハイヤーキーを構成しているから、どの部分に衝激が加えられるかによって変化の可能性が異ってくる。

(a)社会システムはシステム—サブシステムの関係で関連しているだけでなく、システムはサブシステムを統制する関係にある。従って発生する緊張がいかなる位置にあるかによって変化の可能性も変る。下位のシステムの緊張は上位のシステムによって構造変化に至らぬ前に未然に統制される。

(b)次にシステムの構成要素は統制のハイヤーキーとしてみると、「価値→規範→集合体→役割」の順に統制のハイヤーキーを構成している。価値は規範を統制し、規範は集合体（組織）を統制し、役割は集合体によって制約される。役割の変化は、集合体によって統制され集合体の変化は規範によって統制される。これを逆に見れば集合体は役割よりも、規範は集合体よりも、価値は最も変化し難いものである。

④最後にこれらのダイナミックスに附加的な条件、すなわち構造変化を助成する条件として、パーソンズが示しているように、①既得権による制度的構造が示す抵抗を排除する様なメカニズムがあるかどうか。②変化を推進する分子に対する可能性が与えられているということ。③新しい型のモデルがあるかどうかという点にある。この様な条件に規定されて、構造変化は進展する。以上簡単に変化のダイナミックスについて述べたが、次に変化プロセスのタイプを述べよう。

**変化プロセスのタイプ** 次に変化プロセスのタイプを研究することが必要である。ここでは①価値体系と ②機能分化及びそれに対応する社会システムの分離過程があげられる。

(1)の価値体系の変化の分析は最も重要な変化過程の分析であるが、この変化の分析にとって重要な糸口はモデルの存在であろう。モデルを外に求める後進国型と、内的に進行していく型とが区別される。これらの型の違いによって、リーダーシップ（国家の役割等）の果たす役割が異ってくる。

更に後進国の近代化にみられる様に、技術、機械化の発展と価値体系の直接の対応ではなく中間項として規範的（制度）変容が介在するが、ここには常に或る程度の緊張が発生し、やがて価値体系への影響がみられる。

(2)の機能分化とこれに対応する集合体の分離過程については、まずキンシップから職業集団の分離があげられる。即ち経済機能と社会化機能との分離である。次に政治と経済機能の分離があげられる。即ち生産、消費の単位と政治の単位の分離過程である。後進国に見られる様に、特定のキンシップがそのまま国の政治権力を握っている様な型から制度的な分離がはかられる。更に政治と統合機能の分離。これは行政と司法の分離過程である。政治権力と司法権力との癒着した構造から両者の分離が見られる。次に統合と社会化機能の分離過程がある。

この様な機能分化と集合体の分離過程が重要な「構造上、機能上」の変化を為している。

以上変化論に関する幾つかの見解を検討しながら、基礎的な問題を整理検討してきた。変化の問題は非常に複雑な過程であるから、枠組を十分に整理しておかなければ十分な成果は望み得ない。基礎的な問題の整理検討を積み重ねていくことが、この困難な問題に取り組む為の最も着実な道であると思われる。

## 註

- 1) 構造機能分析は古く迄さかのぼることが出来るであろうが、ここで直接関連するのはE・デュルケームであろう。然しデュルケームの形態論の焦点は固有の社会構造というより、素材としての人口であった。ラドクリフ・ブラウン以降構造概念が現われるが、最も明確な形で形成されるのは文化人類学に於ける価値・規範の概念であろう。
- 2) T. Parsons, *The Social System* 1951, pp. 480—535.
- 3) T. Parsons, ed *Theories of Society* pp. 30—79.
- 4) ベラー著堀一郎訳「日本の近代化と宗教倫理」35—36ページ
- 5) 同 12—307ページ
- 6) ベラーのこのような形型変数と四つの機能分化の図式の結合は、かなり意恣的なものであるように思われる。パーソンズの修正された型相変数は「状況のサイド」「態度のサイド」が結合されたものに成ったのであるが、ベラーの場合「状況のサイド」のみを組合せ四つの次元と結合させている。

- 7) ベラー著、堀一郎訳「日本の近代化と宗教倫理」 39ページ
- 8) 同 32ページ
- 9) 思想1963年11月号 16ページ
- 10) レヴィの見解に関しては、1960年夏同志社に於て開かれた京都アメリカセミナーの講義によつて  
ている。
- 11) レヴィの型相変数がパースンズのものとは違ふ点  
は、パースンズの場合、二者択一の選択である  
のに対して、レヴィは程度の問題と考えている。
- 12) W. E. Moore, *Social Change* pp. 89—93.
- 13) *ibid.* pp. 93—105.
- 14) J・W・ホール日本の近代化—概念構成の諸問  
題 思想1961年1月号 40—48ページ
- 15) E・O・ライシャワーの近代化に関する発言は、  
日本近代化の歴史的評価 中央公論36年9月号  
近代史を見つめる  
朝日ジャーナル37年6月10日号  
日本と中国の近代化  
中央公論38年3月号  
その他多数ある。
- 16) ロストウ著木村訳「経済成長の諸段階」
- 17) 荒瀬豊「近代化の主役は誰か」現代の眼、39年  
5月号
- 18) T. Parsons, ed. *Theories of Society* p. 71.
- 19) T. Parsons' ed. *Theories of Society* p. 71.
- 20) 集合体は第三位のレベルであるが、[全体社会に  
及ぶような大きな集合体のリーダーシップの構  
成の重要な変化は低次の価値変化よりも重要な  
影響を及ぼす。
- 21) 社会思想上の変化論の多くは、外因に注目した  
ものである。地理的環境・生物学的遺伝論、傑  
出したパーソナリティー論、宗教的観念、人口の  
サイズ等いづれもそうである。
- 22) T. Parsons, *opcit.* pp. 71—72.
- 23) *ibid.* pp. 72—74.
- 24) *ibid.* pp. 73—74.
- 25) *ibid.* p. 74.
- 26) これは Positive-negative, compulsive alina-  
tions-compulsive conformity の二つの軸の  
組合せによつて rebelliousness, withdrawal,  
ritualism, compulsive performance の四つ  
が出来た。これは①ユートピアの理想的未来  
への幻想 ②理想化された過去の状態への幻想  
③現状に於ける保証への幻想 ④古い構造の中  
の攪乱要素を除去することへの幻想である。
- 27) T. Parsons, ed. *Theories of Society* p. 71.
- 28) *ibid.* pp. 76—78.
- 29) ベラーの研究はその一つである。
- 30) T. Parsons, *opcit.* pp. 78—79.